

由井正雪の変と中原代官

—江戸時代前期—



「お代官さま、すすがや煤ヶ谷村（現清川村）に怪しい者たちあやがやってきました、村人からの通報がありました」

手代（代官の部下）が、あわたたしく中原の代官陣屋じんやに駆け込んで言いました。

「それは、手配中てはいの由井正雪の仲間たちか」

代官の成瀬五左衛門は、緊張した面持ちでそう聞きました。

慶安四年（一六五一）七月、由井正雪、丸橋忠弥まるはしちゆうやらの浪人たちが幕府への反乱を企てます。ところがこの計画は幕府の知るところとなり、丸橋忠弥は江戸で捕まり、由井正雪も大阪に向かう途中の駿府の宿で、幕府の捕り方に包囲され自害しました。

そののちも、これに加わった仲間たちの搜索そうさくが続けられていたのでした。

煤ヶ谷村からの通報は、直ぐに同じ中原代官の坪井次右衛門にも伝えられました。

このころの中原代官は、相代官あいだいかんといって二人の代官で相模国中郡の幕府直轄領ちよつかつりようを支配していました。

「先日、中井なかい（現中井町）方面で小田原藩の兵が取り逃がしたという連中だと思われます」
「丹沢山中に逃げ込んだと聞いたが、その者たちに間違いないか」

由井正雪の仲間である渥美次郎右衛門あつみじろう えもんと芝原又左衛門しばはらまたげ えもん、その息子の七兵衛しちべえ、小者の甚三郎じんざぶろうの四人は、江戸を脱出して、東海道で由井正雪のあとを追ったのですが、箱根はこねの

関所せきしよの警戒が厳しくなっているのを伝え聞いて、道やぐらざわおうかんを矢倉沢往還に変えたのです。

ところが、中井で小田原藩の兵に見つかってしまい、そこからさらに逃げて、行方ゆくえが分からなくなっていました。

「どのように現れたのだ」

手代は村人から聞いたことを伝えます。

夜分やぶんになって一軒の村人の家に、四人の男たちが突然現れて言いました。

「道に迷い、そのうえ空腹なので、宿を借り食事がしたい」

「見知らぬ者に宿を貸すと、おとがめを受けるので、本来ならお貸しすることはできないのですが、もう夜も遅く大変困っているご様子……。腰に差した刀を預からせていただけのでしたら、お泊めいたしましたしょう」

村人がそう言うと、四人はしぶしぶ承諾したという。

手代の報告は続きます。

「今は、宿にした家を十五歳から六十歳の男たちが、鳶口とびぐち、鉄砲、鎌を持って嚴重に囲んでいるとのことです。もちろん、相手には気づかれていません」

さっそく、手代の宮川角右衛門みやかわかくうえもん、小川吉左衛門おがわきちざえもんの二人が、部下数十人を引き連れて、煤ヶ谷村へ向かいました。村につくと、渥美たちがいるのは別の村人の家に入り、作戦を立て夜明けを待ちます。

次の日、名主なぬしの伝左衛門でんざえもんは、渥美たちにごう言いました。

「今日は、村の鎮守ちんじゆの祭りなので、お役人が参られています。道に迷った旅人に宿を貸したことをお話ししましたら、いちおう簡単なお調べをするとのことです」

「ならば私が行って説明をしよう」

うまく言い逃れられると思った渥美は、伝左衛門のあとについて行きました。



その道の反対から村人のふりをした足軽の市兵衛が、何食わぬ顔で近づいてきます。

通り過ぎようとしたそのとき、市兵衛は「ご上意」と言っじょういて、渥美を蹴きってころばし、そのまま取り押さえてしまいました。

次に芝原親子にもこう言っつて連れ出します。

「先に出向いた方のお話わに間違まちがいがないことを、あなたからも申し添そえてください」

これまた、市兵衛が見事な技で二人を取り押さえました。残る小者は村の若者たちに

よって捕まえられました。

捕えられた四人は、いったん中原代官陣屋に連れていかれ、そのち江戸へ送られることになりました。

「この恨み七代まで崇つてやる」

馬に乗せられた渥美が、ものすごい形相で村人に向かって叫びましたが、

「誰かを恨むことではない。我々に運がなかったのだ」

芝原はそう言って、空を仰いだのです。

そのち、煤ヶ谷村には、幕府から褒美として米三〇〇俵がくだされ、狩猟のための鉄砲を持つことが許されました。